瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 29
1月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（54） …… 32
恵贈俳誌拝見（24） …… 34
特別作品「西フランス巡り」 …… 36
他誌転載 …… 38
琥珀集作品鑑賞 …… 40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 43
俳誌交歓 …… 45
句集「九十九島」共鳴句Ⅲ …… 46
「粥の味」共鳴句Ⅱ …… 48
妣の国父の蒼天（46） …… 50
神戸吟行記 …… 52
エッセイ「靴」 …… 54

2013/1　第82号

今月の一句

紺ふかき装束翁や初蹴鞠　桂樟蹊子

（昭和四十三年作）

京都今出川の旧社格官幣大社白峰神宮は立派な小賀玉の木でも知られているが、公家飛鳥井家の蹴鞠式の宗匠を伝えている。

紺色の深い色彩の装束を纏った翁のきびきびとした初蹴鞠の儀式に参列された師は、その古都の伝統のゆかしさに感銘を受けられた。樟蹊子独特の品格と格調の高さを発揮された一句であろう。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

しぐれけり

塩路隆子

吾亦紅明智贔屓の里に生れ

纏ひ来し闇を払ひてジャケツ脱ぐ

売られゆく仔牛の夜鳴き時雨けり

冬ぬくし古きカメオの銀小筥

麗しの国に断層肌寒き

冷まじや画中少女の黒真珠（フェルメール展）

寒燈の影身じろがずひとり刻

PDF= 俳誌の salon

一月号光耀抄

塩路　隆子選

秋うららワルツのやうな筆運び　松岡　和子
よろづ屋は琴の師匠よ律の風　小澤　菜美
夕闇に燈籠揺れて「さんやーれ」　山口キミコ
潮騒におけさ節聞く夜寒かな　竹内　悦子
虫すだき野にゐる心地夜の更けて　桂　敦子
木の実降りシヴァ神在はす荒れ聖地　伊藤　純子
自分史は残さぬ決意鵙の贄　笠井　清佑
姑の忌や一壺に秋を集めたる　杉本　綾
露天湯よりべた凪の海冬ぬくし　山崎　真義
竹林のしじま切裂く鵙の声　石川かおり
雁わたる榎大樹の一里塚　伊東　和子
紅葉背にもみぢ渓へのをんな橋　橋本　靖子
晩秋の潮待ち港常夜燈　片岡久美子
ローカル線藁塚立つ郷の閑かなる　川崎　利子
子の赴任は民話の里よ林檎季　紀川　和子
金賞と同じルーツの菊なれど　北尾　章郎
衣替ふるところも見せ場菊人形　国包　澄子

PDF= 俳誌の salon

秋天を領せる社大柱　小西　和子
妖艶なる秋薔薇の名はエマニエル　西郷　慶子
小春日を纏うて農夫ギター弾く　坂上　香菜
深層の崩壊秋思紀伊の国　坂根　宏子
手造りの湯呑の重し濁り酒　塩路　五郎
山の辺のカフェは小春の蔵二階　鈴木　照子
遊ぶ子の声の散りゆく秋の暮　田中　浅子
箸つける九谷の皿の河豚の華　辻　知代子
小鳥来る間口の広き虫籠窓　長濱　順子
寒かろと急ぎ張替へ客ふすま　福本すみ子
黒マント魔女めく夜の靄深き　藤見佳楠子
パティシエのほのほ饗宴焼りんご　松田　和子
叢の第四楽章残る虫　三川美代子
闇に浮き光放てる土ほたる　宮越　久子
鷹の舞ふ野にあるもののひそとして　宮崎左智子
利き酒のいく種異なる透明度　宮田　香
身ひとつと言へる気軽さ石蕗咲きて　森下　康子
酒を酌むあては淡州赤なまこ　西田　史郎
愚痴言はぬ母の面影紫苑咲き　吉田　宏之
空高し水軍太鼓鳴り響き　山崎　里美

PDF= 俳誌の salon

三千を駆けし駿馬の背に秋陽　山本　孝夫
厳かに三井の晩鐘秋気澄む　増田　一代
潮風の外人墓地や秋の声　森田　利和
掌に小さき青空龍の玉　松田　洋子
天高くどっと歓声毛槍跳ぶ　高谷　栄一
秋の雪道ぬかるめば湯の恋し　谷口　俊郎
遥かなる妻の青春小鳥来る　阪本　哲弘
作り置く独り住まひへ湯気おでん　渡部　法子
秋時雨ダム千丈は藍に染み　山内　節子
わが膝に黒猫眠るハローウイン　山田　愛子
ファド流し留守居の自由秋の雨　山本　丈夫
茹上がる丹波枝豆句の成らず　横田　矩子
裸木となりて備はる身だしなみ　吉田　希望
高齢者ばかりが降りる小春バス　和田　郁子
あれこんな処にも跳び竈馬　和田森　早苗
つくづくと美しき国なり文化の日　粟倉　昌子
移植せし腰骨痛む長き夜　飯田美千子
待合はす疏水のほとり秋袷　井口　淳子
比良渓の起伏に沿へる秋の水　板倉　安正
葭舟を作る男の秋ロマン　伊藤　和子

PDF= 俳誌の salon

だまし絵の狐さがせり秋の夜　伊藤　憲子
具沢山汁にむかごの実を加へ　伊庭　玲子
谷戸の田の騒ぎ一面穐かな　大島みよし
夕月やなほ暮残る白き壁　大松　一枝
ハロウィンの大きな南瓜パレードす　河田　孝子
道端に吊売る野菜豊の秋　河野　良子
あれこれと気紛れランチ食の秋　北田　敏子
コスモスのとりどり揺るる陶の里　木戸　宏子
重詰の展示始まる神無月　小林　久子
日照雨して今津は蕎麦の花盛り　笹井　康夫
穂芒や野にひとすぢの風の道　佐用　圭子
秋晴にうな肝食べて眼の検査　鷲見たえ子
父と子の秘密の木の実宝箱　田中　久子
橋ほとり僧衣を返す秋の風　辻　香秀
鬼の碑の映る水面や石蕗の花　中川すみ子
戦地よりのはがき五行や赤まんま　中村ふく子
絡み解く電気コードや初炬燵　中本　吉信
秋の虹独りで紅茶飲めるとき　能勢　栄子
解禁のいせえび跳ぬる秋日和　秦　和子
謎深き土偶ふくよか秋の展　藤本　秀機

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

秋時雨

小澤　菜美

問屋場の框黒ぐろ杜鵑草
きのこ飯香るよろづ屋返事無く
よろづ屋は琴の師匠よ律の風
秋の戸を鎖して早発ちひとり旅
山帰来の実の這ふ背戸や茶染邸
鈴鹿路の変らぬものに秋時雨
点々と鴨の来れり近江空

野ぶだう

松岡和子

紅葉を嵌め込む峡の生水かな
「おやま」てふ土葬の森や初紅葉
脈々とをんな仕事の夜なべかな
秋耕の人らいづれも山を負ひ
霧走り帷めぐらすさまの景
鎮守杜亡母も食みたる野のぶだう
秋うららワルツのやうな筆運び（御陽成天皇の書）

宇治田楽祭

山口キミコ

「さんやれ」の躍りに混じる見物衆
夕闇に燈籠揺れて「さんやーれー（さちあれ）」
中洲いま宇治田楽（でんがく）祭や秋の宵
軽業の散楽伝へ秋祭
古典の日言祝ぐ宇治の田楽祭
菟道てふうさぎ童の躍りかな
笛太鼓止みて家路や肌寒き

PDF= 俳誌の salon

佐渡の秋

竹内　悦子

潮騒におけさ節聞く夜寒かな
冷まじや電気仕掛けの金坑夫
秋雨中傘さして乗るたらひ舟
江戸期よりの金鉱廃れ山紅葉
遊廓の残る一角そぞろ寒
穐田に遊ぶ朱鷺見て満たさるる
なほ惜しむ旅の土産のおけさ柿

秋の草

桂　敦子

向日葵の枯れて吹かれて佗しかり
池の面に即かず離れず蜻蛉かな
虫すだき野にゐる心地夜の更けて
天高し新横綱の土俵入
非業の死遂げし武将の墓所や萩（瑞泉寺）
読書の日と決め図書館へ秋うらら
風受けてそよぐがゆかし秋の草

ベトナムにて

伊藤　純子

満月を祝ぎけり角燈（ランタン）万と吊り
木の実降りシヴァ神在はす荒れ聖地
アオザイを靡かせバイク秋晴るる
大花野に水牛の群あひる群
洞窟の内は迷路や水澄める
タロイモの収穫家族総出にて
帝廟の華麗によぎる秋思かな

長き夜

杉本　綾

風沁みて木犀の香の重くなり
快音のゲートボールや爽やかに
姑の忌や一壺に秋を集めたる
木洩日や捥ぎたる柚子の芳しく
輪廓の美しき棚田や曼珠沙華
長き夜やよき事のみを思ひ出し
イチローの案山子に怯む雀かな

PDF= 俳誌の salon

神の留守

笠井　清佑

自分史は残さぬ決意鵙の贄
山の辺に溝蕎麦しるべ神の道　（山の辺の道三句）
三輪の杜眠りにつきて神の留守
康成の万葉歌碑や枯野道
「近き日に」決着つける薄紅葉　（野田総理）
宮跡は芒の覆ふ原となり
町内の防災訓練冬ざるる

柿紅葉

山崎　真義

青空に映えてきらめく柿紅葉
見事なり日毎彩増す柿もみぢ
柿紅葉の銹朱夕日に透かせけり
露天湯よりべた凪の海冬ぬくし
立冬や日の出の海に魚船航く
玉葱の苗植ゑ急ぐ小春かな
冬晴の銀輪の影フル回転

梅擬

石川かおり

投入れに宝石めきし梅擬
陽だまりにオリーブの実や異人館
天平の瑠璃の杯秋深き
ほの暗し定家庵の石蕗の花　（厭離庵）
行く秋や笹の葉擦れに耳すます
こだはりはひとつづつ捨て柳散る
竹林しじまの切裂く鵙の声

吾亦紅

伊東　和子

新聞紙重ね一束秋の行く
遠き日の絣半纏一葉忌
三宝の神還りませ卵割る
ねこじゃらしを無視して歩く鬱の猫
里はづれの野風さはさは吾亦紅
色鳥来山門近き風致地区
雁わたる榎大樹の一里塚

PDF= 俳誌の salon

ランドマーク橋　本　靖子

小春日をゆるりと回し観覧車（神戸三句）
ランドマークの灯る山腹冬はじめ
異国ムードの居留地巡り冬ぬくし
北風に煽られ縋るかづら橋（祖谷四句）
紅葉背にもみぢの渓へをんな橋
散り紅葉渓なほ深き平家村
猪鍋を頬張る夕餉祖谷泊

潮待ち港　片岡久美子

爽やかや漁船の舫ふ鞆の浦
晩秋の潮待ち港常夜燈
鰡跳ぶ頃海遠まきの山暮るる
海蛍の妖しき光秋の浜
一隅のコスモス畑の倒れやう
曲水のなごり庭園秋の蛇
あちこちに祠まつりや鵙の声

藁塚　川崎　利子

ローカル線藁塚立つ郷の閑かなる
毬踏んで子と競ひ合ひ栗拾ふ
秋陽はじく丹波の壷の並列に
閑村を飾る山柿撓りけり
賑ひてゲートボールや冬芒
展覧会の写真並べて冬隣
甦る口三味線や冬の蝶

金木犀　紀川　和子

菊の香の優しくなりぬ入日どき
小春日を賜り一喜一憂す
子の赴任は民話の里よ林檎季
たをやかな絆生みたり雪の国
難聴の平癒祈願や菊の宮
金木犀遥けき夢を呼びさます
秋光や北山杉の秀の凛と

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

紫苑

吉田　宏之

飛鳥路の笑顔の媼柿を剝く
白壁に柿の実映ゆる二月堂
夫が刈り妻が束ぬる稲穂かな
棚田畦にお役御免の案山子かな
愚痴言はぬ母の面影紫苑咲き

道後温泉

山崎　里美

あちこちに子規の句碑あり秋澄める
夕日うくる松山城やみかん風呂
柿喰うて内子白壁和らふそく
空高し水軍太鼓鳴り響き
空澄めるぼっちゃん列車に諸手振り

菊大輪

山本　孝夫

菊日和将に駿馬のゲートイン（菊花賞三句）
三千を駆けし駿馬の背に秋陽
勝利騎手菊大輪を高々と
一面の刈田となりて山近し
隠れん坊潜れる藁塚に夕陽の香

赤海鼠

西田　史郎

酒を酌むあては淡州赤なまこ
能登淡路なまこ談義に酒すすむ
女子会の妻は三都の紅葉旅
干柿の程よき甘さ今年また
酉の市無事を願へる人絶えず

墨磨りて

田下　宮子

墨磨りて心静めむ文化の日
枯菊を焚く人見えて木偶屋敷
どの木偶も肩を落せり霜の声
冬ざれて髪の乱るる瞽女の木偶
夕されば草の絮とぶ瞽女の径

PDF= 俳誌の salon

一月号月評

塩路　隆子

２０１３年の最初の号である。去年に続いて、多くの人に光を当てて新人の発掘に努めたいと思っている。月評には、その月を代表する良い作品を取り上げたいと思うわけだが、一月号に選んだ巻頭・副巻頭の人は、たまたま前号の副巻頭・次点の人達であったことに驚いた次第。これらの作品をどうして選んだかを月評から読み取って戴きたい。

秋うららワルツのやうな筆運び　　松岡　和子

天皇の書の展覧会に行かれた時の作品で作者のまえがきを見ると江戸時代半ば、１０７代天皇「後陽成天皇の書」とある。一見して解るようにこの句の中七「ワルツのような」の措辞に惹かれる。天皇と言う立場の人の書を、現代の若人が捉えた感覚の新しさ褒めたい。天皇に限らず筆運びの軽快さを、曲のリズムに置き変えられた表現の上手さは作者独特のものであろう。楽しませて戴いた。

よろづ屋は琴の師匠よ律の風　　小澤　菜美

前掲の句の作者より少し年配の作者である。スーパー横行のいまも馴染みのあるのは「よろず屋」である。生活に必要な種々の品物、茶碗から地下足袋、ろうそく、肌着、おもちゃと一軒の店で何でも揃えられる店がよろず屋である。そこの店の女主人が琴の師匠であると言う。

そこまでなら感動は半分になる。「律の風」の下五が大元の一石の役目。良い季語を見つけられた。秋らしい感じの風を言うが「律」から来るイメージは己に掟を定め物事を判断し取りさばく意を持つ厳しさがある。琴の師匠らしいいい季語を見つけられた。感服した。

夕闇に燈籠揺れて「さんやーれ」　　山口キミコ

「九十九島」の作者は最近よく祭に出かけられる。お住まいの宇治、また長崎のおくんち祭などに出かけられている。これは宇治祭の句である。「さんやーれ」とは「幸せになーれ」のなまったものであり、夕闇のなかでこれを唱えながら踊り跳ねる躍動的な祭の行事である。燈籠までがその踊りに揺れるとはうまく表現された。句集を上梓されてから益々句風を広げ新しい分野への挑戦が見えて楽しい。頑張って頂きたい作者である。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon